

現代マスツーリズムの特性についての一考察

— バナル・マスツーリズム論の展開 —

大橋 昭一

I. 序—問題の経緯

現代のマスツーリズムは、ごく一般的にいうと、概ね資本主義体制の確立とともに始まり、資本主義体制の進展とともに発展してきた。その創始のメルクマールとされるものは、一般的には、1841年7月5日トマス・クックが催行した、鉄道を使ったパッケージ・ツアーであるが、パッケージ・ツアーそのものは、それより以前に始まっている。

すでに1818年イギリスのエメリーは14日間にわたるスイス行き馬車ツアーを20ギニーで発売している (B2, 訳書24頁)。鉄道そのものが出現したのは、1830年であるが、鉄道を使ったパッケージ・ツアーとしては、すでに1836年イギリスでウェードブリッジとウェンフォードブリッジ間について割引運賃による特別列車の運行が行われ、約800人の乗客があった (B2, 訳書24頁)。

トマス・クックが1841年7月5日に催行したパッケージ・ツアーは、パッケージ・ツアーとしては最初のものではなかったが、出発地でも到着地でも見送り人や出迎え人が多くあり、到着地でイベントもあって、かなり鳴り物入りで挙行されたもので、強く人々の耳目をひくものであった。また、トマス・クック社が行ったツーリズム業におけるその後の巨大な業績からも、これが強く注目されるものとなった。

本稿で問題意識とする点は、トマス・クックらによるこうした一般大衆を対象にしたツーリズム (マスツーリズム) に対して、その創始のころから、こうしたツーリズムの大衆化は、一般大衆の地域密着性を弱め、かつ、旅・旅行の品位を落すもので、望ましいものではないという批判があり、これに対して、トマス・クックらがツーリズムの民主化に寄与するものであると反論を展開している点である (B2, 訳書36頁)。

この点は、言葉のうえでも表れている。イギリスでは、それまでの富裕階層を対象にした旅・旅行は、travelと呼ばれていたが、この新しい一般大衆向けの、旅行業者の手配や指示のもとにただ受動的についてゆけばいいようなもの (sheltered) は、travelとは区別して、tourismと呼ぶのが相当であるという声があり、tourism が一般化したのである。それは、ブレンドン (Brendon, P.) によると、1811年ごろのことである (B2, 訳書27頁)。

travelは、フランス語のtravaillerに通じる言葉である。travaillerは「働く」、「労働する」を意味する言葉であるが、ただし、その労働は「苦しいもの」、「辛いもの」という意味のもので、英語では、“toil and trouble”と規定されるlabourと原意を同じくする。つまり、travelとtourismを区別する論者は、travelとは本来“toil and trouble”なものであり、それを成し得る者だけができるものだというのである。ちなみに、英語等では労働について今1つの言葉がある。英語の場合はworkである。これは、労働でも遣り甲斐があり、楽しいものであって、労働後の作品を期待して肯定的にとらえる場合などに用いられる。

以上からもわかるように、英語で、主として一般大衆を前提にした集団的旅行が、travelではなく、tourismと呼ばれるようになったのは、旅・旅行の内実の違いもさることながら、旅・旅行する者の階層の相違が背景にあることが大いに注目されるべきことである。端的に言えば、一般大衆対象的ツーリズム(端的にはマスツーリズム)は、それが一般大衆を対象にしていることにおいて、富裕層からは歓迎されざるものであったのである。

これまでのツーリズム論史では、こうした階層の差異を踏まえて、一般大衆対象的マスツーリズムに対して、当初からそれを別名で呼ぶだけではなく、そうしたツーリズムに対する批判論ないしは(それを)抑制(すべきとする)主張がある一方、そうした批判論ないし抑制論に反論する主張、すなわち、一般大衆対象的ツーリズム(マスツーリズム)を肯定・擁護し、積極的に推進すべきとする主張があり、両者は今日においても鋭く対峙し合っている。

後者の一般大衆対象的ツーリズム(マスツーリズム)についての現代における積極的な擁護論・推進論の強力な主張者には、イギリスのブッチャー(Butcher,J: 参照文献B3,B4)やシャープレー(Sharpley,R: 参照文献S1)らがある。かれらの主張の論拠は、大要、次の3点にある(詳しくは参照文献Ω1, 17,228-230頁)。第1に批判論・抑制論は、それまで旅・旅行をいわば独占してきた富裕層の主張を代弁するものであって、今日では認められない。現在では一般大衆の旅・旅行の願望をできる限り多くの者が享受できるようにすること、すなわち旅・旅行の大衆化・民主化が時代の要請であり、それを抑制することはできないし、抑制すべきではない。

第2に、ツーリズム産業はもともと資本主義体制のもとで、資本主義的事業として発展してきたものであり、この事実を無視して規範論的・道徳論的にその可否が論じられるものではない。しかもその主たる顧客である一般大衆の主たる部分は労働者階級であり、現代におけるツーリズム、特にマスツーリズムはその願望にこたえるものである。

第3に、批判論・抑制論の主要な根拠となっているのは、特に今日では、マスツーリズムにより環境破壊が促進されているということであるが、環境は固定的なものでも限定的なものでもない。そうした固定的環境の主張は要するにマルサスにまで遡るものであるが、マルサス理論は今日では妥当性を有さないことが確証されている。また、こうした抑制論で土台とされることが多い国連の持続的発展の命題にしても、一方において環境の発展を含むものであることが決して否定されているのではない。少なくともこの命題は、環境の持続的保持と環境の発展

的開発との両側面を含むものである。

以上で概述した批判論・抑制論と、擁護論・推進論との対抗は、後述のポンス（Pons,P.O.）らの見解も参照して集約的に表現すると、少なくとも現段階では、抑制論はツーリズム目的地の保全などツーリズム提供者側・供給者側の事情を代表するものであり、他方、擁護論はツーリズムの需要者・顧客、すなわちツーリストの願望を代表するものといえることができる。

本稿は、現代マスツーリズムに関する論議にはこれら2つの相反する主張・立場があること、そしてその拠って立つ社会的基盤が異なることを根本的立脚点とし、そのうえにたつて、現代マスツーリズムの顧客はどのような者たちであると理解すべきかについて、考察の手掛かりを得ようとするものであるが、さしあたり、現段階における一般大衆のマスツーリズムのあり方として、世界的に最も論議的となっている地中海沿岸部の観光地・リゾート地について、その主たる顧客であるイギリス人を中心にした北部ヨーロッパのツーリストたちについて、その行動の問題状況を、ポンスらの所論（参照文献P1, P2）を中心に考察するものである。

結論を先にしていようと、ポンスらの主張は、少なくともイギリス若者たちが地中海沿岸部観光地・リゾート地で行っている行為・行状は、基本的には、本国（例えばイギリス）の日常的なレジャー行為の延長と解すべきものであって、これら若者ツーリストたちの行動を理解し、これら若者たちがどのようなツーリストたちであるかを知るためには、これら若者たちがそれぞれの本国においてどのような存在であり、レジャー活動においてもどのような行動を行っている者たちであるかを理解することが先決である、というところにあるが、こうした若者ツーリストたちの行動を、フランスのドゥボール（Debord,G.）のスペクタクル社会論を参照して、バナル（banal）・ツーリズムと名づけている。

本稿は、さしあたり、この点の解明に焦点をおくものであるが、そのまえに地中海沿岸部のマスツーリズムがどのようなものとしてとらえられているかを明らかにしておく必要がある。この点については、ポンスらの所論は、実は、地中海沿岸部観光地・リゾート地におけるマスツーリストたちの行状を扱った、1999年のレフグレン（Löfgren,O.）の問題提起的所論（参照文献L）を契機としたものである。さらにこの点については、レフグレンの所論のうえにたつて、キプロス島のアイア・ナバ（Ayia Napa）およびギリシャ・ロードス島のファリラキ（Faliraki）の場合について実態調査を行い、それを踏まえた論考が、2009年ノックス（Knox,D.参照文献K）により発表されている。ここでは、まず、レフグレンとノックスの所論により地中海沿岸部観光地・リゾート地におけるマスツーリストたちの行状がどのようなものとしてとらえられてきたかを考察する。レフグレンの所論の考察から始める。

なお、参照文献は末尾に一括して掲載し、典拠箇所は文献記号により文中で示した。

II. 地中海沿岸部マストゥーリズムの特性

1. レフグレンの基本的立脚点

レフグレンの問題意識とするところは、まず第1に、人びとの余暇時間、バカンス時間の過ごし方を文化の問題としてとらえ、そこに現在における人々のアイデンティティや社会的諸関係、そして自然との交互関係についての考え方を見ることができるし、ツーリズムにおいても重要な文化的特性を見ることができるとするところにある (L.p.7)。

レジャーをはじめとする余暇時間は、人間が自らコントロールすることができる度合いの高い時間であるから、そこには人々の自己の生活や行動についての自発的な考え方が現れる。それはその人の、少なくとも余暇時間文化であり、現在では、例えば、不満がどこにあるかを知ることができる場合もある。ツーリズムについてもこのことを知り、認識することが重要であるという。

その際、レフグレンは、そうした余暇時間の過ごし方が、かなりの程度歴史的に規定されたものであり、西欧のような場合にはその多くは18世紀ないし19世紀にまで遡り、すでに当時展開されていた文化的な考え方や形態に依存するところが大きいものであることを根本的立脚点とする。これが、かれの第2の問題意識である。

かれは言う。工業・産業は絶えず進歩を遂げ、新しい観光資源や観光アトラクションを送り出してくるが、「ポスト・ツーリズム (post tourism) のような新しい概念やトレンドは、イベント・マネジメント、エコツーリズム、遺跡の産業等も同様であるが、長い歴史的パースペクティブのなかにおいて、かなり安定的な枠組みのなかで発展をみてきたものである」。それ故かれは、ポスト・モダン主義理論には反対である。「ポスト・モダン・ツーリズム論で主張されている多くの見解は、かなり非歴史的なもの (strikingly ahistorical) である」と論断している (L.p.8)。

ただし、余暇時間の過ごし方のなかでも、ツーリズムは、地方性と国民性と超国民性 (trans-national) の3者のなかで動いているものであるとする。これが、かれの第3の問題意識である。すなわち、ツーリズムは常に、超国民的な生産様式 (mode of production) のもとにあった (ある) ものでもあり、従って超国民的な標準化の動きのもとにあった (ある) ものでもある。ツーリズム産業は、確かに一方では、地方的ユニークさに視点を置き、それに立脚するようにするものであるが、しかし他方、その需要者である顧客は、それがどこの国や地方の者であってもいいものであり、どこかの国や地方の者であることを必要とするものではない。地域的範囲は無関連のものである。

つまり、ツーリズムは、本来は、地方色に立脚し、各地方の文化的差異化を必須の前提とするものであるが、しかし反対に、ツーリズムの顧客は、それをエキゾチックな他者であると感じることを必要とするものである。それ故、ツーリズムはエキゾチックな他者である物を超国

民的、超地域的に標準化してマーケティングすることから生まれるものである。換言すれば、それは「グローバルなもののローカル化」(localization of the global) といっているものであり、ツーリズムは、全体としてみれば、地方性については関連性と無関連性との統合体である。

しかし、こうしたマーケティングの標準化は、顧客であるツーリストをも標準化するものではない。これは、前述のレフグレンの第1の問題意識に帰着するかれの根本的命題といっているものである。レフグレンは次のように言っている。これまでのような「マスツーリズムでツーリストたちが経験するものは演出されたものであるという見地にたった研究は、多くの場合、すべてのツーリストたちが持つ個人的経験のユニークさを軽視したり、無視したりするものである。もともと、全く同一といっている余暇活動、ツーリズムというものは、決してあるものではない」(L,p.8)。

特に、これまでのマスツーリズム研究では、ツーリストについてステレオタイプ的な見解がとられてきた。この点は、マスツーリズムの顧客はこれをツーリストと呼び、そうでないツーリストはトラベラーと呼ぶことなどに表れていたが、こうした「真のトラベラー」と「俗物的ツーリスト」との区別・対称は2世紀も前から続いてきたものであると、レフグレンは力説している。

トラベラーにしる、ツーリストにしる、旅・旅行上の行動や行状は、要するにそれぞれの者の日常生活上の行動や行状 (everyday practice) を反映したものであり、その意味において階級的階層的差異に立脚したものである、というのがレフグレンの言わんとするところであるが、その際フランスの社会学者ウルバン (Urbain,J.:参照文献U2) の所説に依拠して、トラベラー・ツーリストにはフィリアス・フォッグ的なタイプと、ロビンソン・クルーソー的なタイプとがあるとする (cited in L,p.9)。

前者は、旧来の男性中心の中産階級基盤的な、観て歩くことに熱心な、いわゆる上品なトラベラーをいい、後者は、日常生活からの脱却を主眼とし、旅・旅行でもリラックス性の追求に重点を置くものであるが、平均的にいえば、現代における地中海沿岸部観光地・リゾート地におけるマスツーリストたちの多くは、後者に属する者たちであると、レフグレンは結論づけている。次項では、これら地中海沿岸部ツーリズムの歴史について考察する。

ちなみに、レフグレンによると、地中海沿岸部マスツーリズムは、第二次世界大戦後では1949年、同地域向けのチャーター航空便がコルシカに着陸した時に始まるが、「エキゾチック性ならびに太陽 (sun)、海岸 (sand)、海水浴 (sea) の3Sを求める現代ツーリズムは、ここ地中海沿岸部で始まり発展したものであり、もしわれわれが、パッケージ・ツーリズムの盛行を巨大な産業の進展としてとらえ考察しようとするならば、われわれはここを、すなわち地中海沿岸部を、スタート点としなければならないのであり、ここで進展したツーリズムのモデルが、ツーリストのグローバル化とともに、世界の他の文化に広がったのである」(L,pp.156-157) という歴史的意義をもつ。

2. 地中海沿岸部ツーリズムの歴史

地中海は、歴史のかなり早い時代からヨーロッパでは戦争も含めて西欧における種々な交流の舞台となってきた。西欧社会の中心をなしてきたといってもいい。しかし、西欧社会の中心という役割は、きわめて概略的にいえば、遅くとも17世紀ごろには終わった。1492年のコロンブスによる“新大陸発見”などに象徴される大航海時代の到来とともに、それまでの世界の中心という地中海の役割は終わり、世界の中心は大西洋などに移った。これにより、ヨーロッパの中心的諸国も次第にヨーロッパ北西部に移った。地中海沿岸部はヨーロッパのなかでも徐々に周辺地的存在となり、人的にもヨーロッパ南部から北部へ移民する者が起こるようになった。

ツーリズムの点からいえば、いわばこうした南部から北部への住民の移動と引き換えに、北部から南部への観光客が増加した。その典型例であり、歴史的な発端ともなったのは、1600年代末から1760年代ごろまで続いたグランドツアーであった。これは主としてイギリスの貴族子弟たち（18世紀ごろには新興ブルジョアジー中心）がパリなど以外にイタリア諸都市を巡って種々な意味で研修することを主たる目的とする旅行であった（詳しくは参考文献②）。スウェーデンやフランスの貴族子弟でイタリアを訪れる者もあったし、ゲーテの「君よ知るや南の国」に象徴的にみられるように、イタリアなど南の国は、北部の者にとっては文化的にも気候的にも憧れの地であった。

こうしたヨーロッパ北部の人たちが、イタリアやギリシャを中心に南部へ旅行する気運は、ナポレオン戦争によってさらに拡大された。その際主流になったのは、やはりイギリス人たちで、ツアーの送り手として決定的な役割を演じたのはトマス・クックであった。かれによるイタリア行きパッケージ・ツアーは、1866年に始まるが（B2, 訳書190頁）、当時トマス・クックらによりローマははじめイタリアに送り込まれたイギリス人は、かなりの数のものであったので、例えばアメリカ人たちの間では「ローマではイギリス人に従えばいい」という言い伝えができたほどであった（B2, 訳書191頁）。

旅行者には婦人も多く含まれており、トマス・クックなどのパック・ツアーは婦人の旅を一般的に可能にした功績もあった。当時の、イタリアを中心にしたパッケージ・ツアーは主として鉄道を使用するものであったが、蒸気船によるツアーも増加し、それとともに行き先も地中海沿岸部各地に広まり、西はスペインのマラガ、東はトルコのコンスタンチノーブル（現在名：イスタンブール）まで達し、エジプトなども目的地となった。

こうした動きの中心をなしたのはイギリス人で、鉄道と蒸気船でイギリス人は多くの地をツアー先とした。「地中海は全部イギリス化されている」（Anglicizing the whole Mediterranean）といった声が聞かれ、イギリス式生活文化が各地に持ち込まれた。ローマではすでに18世紀にイギリス人街（ghetto Inglese）ができ、その後アルジェなどにも広まった。こうしたイギリス人街では、イギリス人医師が常駐するところもあった。1899年の資料によると、その数はローマで7人、フロレンスに7人、ナポリに2人、ベニスに2人、マラガに1人、ニースを中心にし

たりビエラ地域には39人を数えた（L.p.163）。

ちなみに、ニースがリゾート地として有名になったのは比較的後のことで、例えば18世紀ではイタリアへの単なる通過点としてほとんど無名の所であった。道路事情なども悪く、地域の生活レベルもきわめて低く、イギリス人などでは滞在できる所ではないとされていた。しかし、その後リビエラ地域の温暖な気候が注目され、ニースでは18世紀の終わりごろにイギリス人向けのサナトリウムの施設ができ、冬季をニースで過ごす人が増えてきた。しかし、これらイギリス人の多くは地元住民と交流することが少なく、ニースは、そうした地元住民と没交渉的な外国人グループと対応することを余儀なくされた最初の地域の1つであった。

ニースでは当時、イギリス人たちは海岸付近に居住し散策することを好んだ。それでできたのが海岸通りで、その名も「イギリス通り」(Promenade des Anglais)であった。その名は現在でも残っている。これに対して地元住民の多くは内陸部に居住していた。その後ニースにはロシアの貴族たちも来訪するようになり、リゾート地として世界的に盛名をはせたのは、イタリア領からフランス領になった1860年代以降で、1914年の第一次世界大戦勃発までの間であった。冬季でも日照時間がパリの3倍もあるといったことなどがキャッチフレーズであったが、ツーリストの要望を最大限に満たすよう、ローカル性をほとんど無視して地域の整備が行われ、エンターテインメント施設なども設置された。

しかし当時は、ニースのリゾートシーズンは冬季で、北部ヨーロッパ人たちの避寒の場であった。夏季は閑散としたものであった。夏季のリゾート地として脚光を浴びるようになったのは、概ね1920年代以降で、まずアメリカ人たちの間で、アメリカのマイアミに似た夏季リゾート地として価値あることが注目されたのが発端であった。夏季の日光浴最適地がキャッチフレーズであった。ホテル側でも、閑散となる夏季に顧客増加をもたらすもので、大歓迎であった。

もともと夏季の日光浴は、ドイツやスカンジナビアなど北部ヨーロッパで盛んであったから、この点でもニースは注目されるものとなり、夏季の客も多くなった。ところでこれらの夏季ツーリストたちは、それまでのイギリス人ツーリストたちとは、行動パターンが異なっていた。夏季ツーリストたちは地元住民との交流でも比較的積極的で、古くからのイタリア人街にも出入りするところがあり、ニース本来の古い地域の良さやローカル性が見直されるようになった。今やニースなどリビエラ地域は、地元本来のフランス色と、一昔前のイギリス色と、新来のアメリカ色等が適度にミックスした、世界トップクラスのリゾート地として知られるようになった（L.p.170）。

3. 第二次世界大戦後における地中海沿岸部ツーリズムのこれまでの状況

マスツーリズムの発展という点でみると、第二次世界大戦までのそれは、約言すれば、鉄道と蒸気船を基盤としたものであった。これに対し第二次世界大戦以後のそれは、何よりもバスとチャーター航空便を主要手段とするものである点に特色があり、ツーリスト階層でいえば、

それまでの中産階層中心から労働者・農民階層中心に移行するものであった。労働者・農民階層は安価、かつ安全で、何よりもすべての面について世話をされる (sheltered) 旅・旅行であることが魅力であった。グループ旅行といっても、バス旅行は1台あたりの収容客数が適度で、ガイドの掌握力からも、かつツアーリスト同士の交流の点からも望ましい規模のものである。バスでは1台ごとに一種の共同体的世界ができる。これにチャーター便制が加わり、安価・安全・保護があり、かつ、一種の共同体的世界のなかで過ごせる旅行が可能になった。

一方、労働者の労働状況を見ると、北ヨーロッパ諸国では、一般に、賃金所得額の増加よりも、労働時間短縮の方策がとられることが多く、年間休暇日数は、今日では、概して4週間から1か月になっている。これが安価な長期滞在的旅行を必要とする基盤となっている。

こうした事情を背景に、すでに1960年代、チャーター航空便によるリゾート地としてまず脚光を浴びたのは、スペイン・地中海沿岸部の島、マヨルカ (島) であった。同島を含め、コスタ・デル・ソル全体でみると、ツアーリスト数は1960年600万人であったのが、1975年には3,000万人に増加している (L.p.174)。15年で5倍の増加である。急速なるこの需要の増加に対応するため、リゾート地では旧来ホテルの増築や改築だけではなく、外来資本によるホテルの新築や旧来ホテルの買収・改装等が進行し、レストラン、カフェ、土産物店等も急速に増築・整備が行われた。

ツアーリストでは、ドイツやイギリスだけではなく、スカンジナビア3国などからも多くの来訪客があり、地中海沿岸部リゾート地帯におけるツアーリストたちの行状や行動について、例えばスウェーデンなどでもマスコミ等で種々報道・論評がなされることがあった。これらの報道や論評は、全体的にみると、まず、ツアーリストたちの欲求が要するに5Sにあること、すなわち、Sun (太陽)、Sand (海岸砂遊び)、Sea (海水浴)、Sex (性的行動)、Sprits (飲酒) にあることをセンセーショナルに報ずるものが多く、かつその多くは、ツアーリストたちではヘドニズム的な欲望充足が主目的になっていることを指弾し、抑制の精神が全くないことを指摘するものであった。現地で詐欺・騙しにあって立ち往生する者もいることを報じ、「スウェーデン人の騙され易さ」(gullibility) が改めて立証されているとするものもあった (L.p.174)。

今から思えば、本稿筆者としても、今日まで続いている地中海沿岸部マスツアーリストたちについてのいわゆる悪評は、当時の以上のような報道・論評や伝聞に起因しているところが大きいと思われる。特に地中海沿岸部のそれは、一言でいえば、上記の5Sを中心にしたヘドニズムの利己主義的な欲望充足に志向したもので、地元の社会的環境を含めて環境尊重的精神がひとかけられないといった批判は、ここに端を発しているものが多いと考えられる。

こうした地中海沿岸部マスツアーリズムの目的地としては、その後、スペインのカナリア諸島やロス・サントスなどが注目される所として挙げられてきているが、地中海の東方ではギリシャのエーゲ海諸島、キプロス島、さらに最近ではトルコの諸地域が挙げられている。東欧地域では旧ユーゴスラヴィア、ルーマニア、ブルガリアなどが注目の地となっている。

こうした動きのなかで教訓的なものに、スペインのトレモリーノスのケースがある。同地のリゾート開発は鳴り物入りで宣伝されたものであったが、それについては、1997年すでにトライブ (Tribe.J.) が「戦略が欠如していたため、その結果は混沌というべきもの、不調和に建造物が並んでいるだけの開発に終わったもの」(T1, 訳書37頁)と総括している所である。今日でも「トレモリーノス効果」(Torremolinos Effect)として、観光地も適切な手段がとられないと、衰滅することが必然であることをいう、観光地ライフサイクル効果を示すものとして知られている (L.p.180: 観光地ライフサイクルについて詳しくは参考文献Ω 1, 第9章)。

考えてみると、地中海沿岸部マスツーリズムは、リゾート地のいかんによって大きな違いがあるものではない。例えば目的地への飛行時間をとっても、基本的にはヨーロッパ圏内のツーリストを前提とした場合、ツーリストごとに大きな差異はないし、リゾート地での食・住も多くが標準化されている。ツーリストの来訪時期も夏季もしくは冬季として比較的一律的である。そして多くのツーリストたちの滞在期間は1週間～2週間である。

地中海沿岸部マスツーリズムにはいくつかの共通点があるが、第1はこの点である。地中海沿岸部マスツーリストたちの滞在期間は、概ね「1週間～2週間のパッケージ」(K.p.147)といわれており、ツーリストごとに大きな違いがない。

第2に、地中海沿岸部マスツーリストたちは多くが、グループごとにチャーター航空便で来たり、バスで来たりするものであるから、グループ別に共同体性があるものが多く、グループを越えて交流を図ったり、他のグループに干渉することは多くない。滞在地でも同様な傾向があり、地元民との交流は、善かれ悪しかれ、多くない。レフグレンも、地中海沿岸部マスツーリズムでは、ツーリストたちの国別差異が大きく、これを越えて国別に交流したり、ミックス化する可能性は驚くほど小である、と言っている (L.p.196)。ここに、後述のように、地中海沿岸部マスツーリストたちの行動を特徴づけて、バナル性あるいはバナル・ナショナリズムが強いものとする見解が生まれるゆえんがある。そしてツーリズムの目的地も国別に比較的固定化されたものになっているという特徴がある。本稿の後述の考察を先取りしていえば、地中海沿岸部マスツーリズムについてみると、ツーリストたちは、海外のリゾート地においても、自国で通常行っている余暇活動様式を続けるものであり、その延長行為を行っているものに過ぎない、と位置づけられうる所が大きい。

ただしこのことは、マスツーリストたちの行動が、標準化されたツーリスト行動のなかでも、少なくとも国別差異を持つものであることを意味する。ここに、マスツーリズムにおける標準化の限界があるといえ、ある。国別差異を認めない標準化の強制は、それ故、反発を招く。このことは、一般的にいえば、ツーリストたちの食・住についての対応においては、それぞれのツーリストの国別差異を無視して、例えば観光地のそれを強制することには慎重でなくてはならないことを意味するものである。

限定された標準化を実現する、恐らく1つの方法は、フロントスペース (表舞台) とバック

スペース(裏舞台・準備舞台)の違いを活用することであろう。フロントスペースとバックスペースのいずれにおいて標準化方策がとられ、いずれにおいてナショナル性・地域性が大きくされるかは、状況次第の問題であるが、これにはコスモポリタニズムの考えはどのようになるかという問題も絡んでいる。この問題は、本稿後段で考察する。

その前に、次に、地中海沿岸部におけるイギリス若者たちマスツーリストたちの現在の行動・行状がどのようなもので、どのようにとらえられるべきかについて論じているノックスの所論を考察する。ただし、ノックスの所論のうちここで取り上げるのは、主として地中海沿岸リゾート地におけるイギリス若者たちの実態解明にあてられている部分で、その理論的解明部分は、後段で論述する。

4. 地中海沿岸部マスツーリズムの現状—主としてノックスの所説による—

ノックスが対象としているのは、既述のように、キプロス島南部のアイア・ナパと、ギリシャ・ロードス島のファリラキにおけるイギリス若者を主としたマスツーリストたちの実態である。調査は、アイア・ナパについては2003年、ファリラキについては2004年、インタビューなどにより行われたものであるが、調査は、ホテル、ビーチや街頭など以外でも、例えばナイトクラブ、バー、レストラン等でも行われ、新聞やテレビ等の記事も参考にされた。

アイア・ナパとファリラキにおける若者ツーリストたちの行動は、内容的にみるとガレージ音楽とアイコン的特性に象徴されるものであった。ガレージ音楽を中核としてアルコール痛飲、プールサイドや砂浜でのラウンジング、パーティ、ダンス、本国料理の食事などを主たる特徴とするもので、ノックスによれば、それは一言でいえば、クラブ的休暇 (clubbing holidays) といっているものである (K,p.143)。

アイア・ナパの場合、イギリス若者ツーリストたちの溜り場の存在として注目されるようになったのは、概ね1990年代後半以後のことで、スペインのイビサなどでは家庭的ミュージックが主役であったのとは、対照的であった。ファリラキもこの頃に、アイア・ナパと同様な若者のクラブ的マスツーリズムの地として登場し、ガレージ音楽が象徴的存在になっている。しかし、その音楽は、アイア・ナパの場合とはニュアンスに違いがあり、センセーション度がやや低いものであった。これは、現地当局の注意の故もあったが、ガレージ音楽のタイプの違いもあった。このため、熱狂的とはいえない地域のファン等も集まり始め、かえって、地元特有のコミュニティ的センスを低下させるものという声もあった。

こうしたアイア・ナパとファリラキにおける若者ツーリストたちの行動について、しかし他方では、それはあからさまなヘドニズム的欲望充足の場となっていて、例えばgay holiday-maker といっているものになっているという声もあった (K,pp.144-145)。こうした角度からは、これら若者ツーリストたちの行動は、旅行会社の宣伝の言いなりとなっているような遊びが主流となっていて、(地元民など) 他人に対する思いやりが全くないものであるばかりか、文化無

関連の様相が濃く、地域の自然環境はじめ文化的歴史的社会的環境を無視して、自己満足のみを追求するものであるという見解も多かった。

しかし、ノックスのみるところによれば、こうした報道や論評は、一面的で、皮相的観察に終始しているものが多く、これら若者観光客たちの行動のうちに潜むそもそもの本質的な要因に迫るものではなかった。ノックスによれば、こうした若者観光客たちの行動を批判的否定的にみるものは、旧来的観光客観に立つもので、それは、結局、中産階層の基準に従うものであった。この考え方によれば、そもそも現代マスツーリズムは理解されないものとなり、否定されるべきものとなる。

しかし、例えば地中海沿岸部観光地・リゾート地のなかでも、いわゆる俗化が進み、「俗化されていない土地」という観点からは魅力のないものとなっているものがあるが、そうした所でも訪れる観光客がいることは結構ある。そうした場合、まず問題とされるべきものは、そうした所を訪れる観光客の動機・心情であるにもかかわらず、それを棚上げにして、当該観光地・リゾート地について環境問題ははじめその地域のあり方が、いわば一面的に論議されることがないではない。ノックスによれば、そうした方法は、あまり意味がないものであり、アプローチの仕方に誤りがあるものである。

このことは、もとより現在の非中産階層的、もしくは非エリートのマスツーリズムでは、これまで主流であったレジャー理論や観光客理論がすべて妥当しないというのでは、全くない。例えばヴェブレンが唱えた「見せびらかしの消費」(conspicuous consumption) という要因は (K.p.146:「見せびらかしの消費」について詳しくは参考文献vおよびΩ3)、これらの非エリートの観光客たちにも結構あるものと見られる。

ところで、アイーア・ナパやファリラキの場合、特徴的なことは、概して若者観光客たちの行動領域が明確に限定された範囲にとどまっていることである。それは通常、大きなホテル内かその周辺地に限られ、地元民居住地帯から離れていることが圧倒的に多い。すなわち、地元民居住地帯とは離れた所となっており、観光客地帯と地元民居住地帯とが分離された形になっている。観光客たちはパーティをするような場合でも地元民居住地帯に入ることがほとんどない。これは、観光客たちが地元民たちの行為や出来事に興味がないためではなく、観光客たちが必要なことを行うのに、観光客地帯から出る必要はないようになっているからである。

地元民の側にしても、観光客たちは多くが2週間もすれば、他の者になるから、観光客のいかんに応じて生活を変えることを要しない。新しい観光客たちが、以前の観光客たちと同様に、ヘドニズム的欲望充足の行為にでることは大いにありうるが、アイーア・ナパやファリラキの場合、ホテル側などにおいてそれに対する対応策ができており、地元民がかれら独自の生活基準や慣習を変化させたりすることは少なく、それを持続するのに観光客たちの来訪は大きな障害にはなっていない。

こうした点から見ても、アイア・ナパやファリラキの場合、観光客たちの行動はイギリス本国におけるクラブ的レジャー活動状況と似ているものといえる。その類似性は、アイア・ナパやファリラキでは、イビサの場合などよりも高いといわれる。イギリス本国との類似性を考えると、それは、結局、本国からの逃避形態であるとみていいところが強い。これは、本国の日常的な味わい (the taste of home) を観光地・リゾート地でも維持したいとする欲求とあっていいが、それは、本国においても人々が休日にクラブなどで同じ体験をすることなどにより、同じバックグラウンドを持ちたいという思いに通じるものである。そのことは、観光地・リゾート地においても観光客たちが本国における同じ商品消費しようとする感情に現われている。このことは、アイア・ナパやファリラキのコンビニなどでは、イギリスで広く売られている、イギリス人にはなじみの製品が並べられていることによく示されている。

このことは、考え方を換えれば、現地性の希薄化 (de-exoticizing) であり (K,p.150)、観光客の自国性を強化するものであるが、しかしノックスは、このことをもってアイア・ナパやファリラキに来ているイギリス人たちを非難するのは見当はずれであるという。というのは、これらイギリス若者観光客たちは、キプロスやギリシャの本来の文化を鑑賞したり楽しむために来ているのではなく、自国でも可能かもしれない余暇の過ごし方を、自国以外でしようとしているだけであるからである。イギリスの海岸部は低温で余暇時間を過ごすのに快適ではないから、地中海沿岸部に来ているだけであって、地中海文化を鑑賞したり楽しんだりするために来ているのではない。キプロスやギリシャでもイギリス人たる自国性を保持し、それを変えるつもりはないのである。

従って、かれらは、例えばプラハに来ることがあっても、プラハの文化的資源を鑑賞しそれに大いに感動を受けるということよりも、プラハにもあるイギリス風パブ等で気勢を上げることに魅力を感じる者たちである。その場合、プラハへ行く場合でもヘドニズム的欲求充足を目的とする者がいることはありうる。

以上の地中海沿岸部マスツーリズムの状況に対して、ポンスらはどのような理論的分析を試みているか。次に、それを考察する。

Ⅲ. バナル・マスツーリズム論の概要

1. 問題の提起

ポンスらは、ツーリズム研究を2つの方向に分けることから出発する。それは、観光客の受け入れ先の諸事情はじめ、ツーリズムの提供側サイドに焦点をおく研究と、そうした受け入れ先の顧客である観光客側、すなわちツーリズムの需要サイドに焦点をおく研究とである。このうえにたつて、ポンスらは、地中海沿岸部における現代マスツーリズムについて、自分たちの研究課題は、後者の観点にたつて、その顧客すなわちマス観光客たちが、現在の

ところどのような者たちで、どのような意識を持ち、どのような行動を行っている者たちであるかを解明するところにあるとする。

ちなみに、ツーリズムに関する研究は、これまでのところ、前者の供給サイドに重点をおいたものが多く、顧客であるツーリストたちの考え・行動、すなわちツーリストたちの文化に重点をおいた研究は、多くない。例えばポンスらによると、近年における200余点のツーリズム関係文献（論考を含む）で顧客サイド、すなわちツーリスト文化を主たるテーマとしているものは、1割程度にすぎない（P1,p.2）。

この場合、ポンスらの見るところによると、地中海沿岸部へのマスツーリズムは、歴史的にみると、次の3点を特色とするものである（P1,pp.1-2）。

第1にそれは、少なくともヨーロッパについてみると、レジャーの民主化、ツーリズムの社会各層への拡大をもたらしたものであり、ツーリズムの量的拡大を推進したと位置づけられるものである。

第2にそれは、質的な点では、ツーリズムにおける規模の経済を推進したものという意味において、ツーリズム生産様式（mode of tourism production）に変革をもたらしたものである。別言すれば、レジャーの工業化（industrialization of leisure）、すなわち、ツーリズム製品の標準化と大量生産化、コスト縮減、ツーリズム製品の大量消費化、ツーリズムのための場所（空間）と時間の集中化を可能にし、実現したものであり、この意味において、フォード主義的生産方法の諸原則をツーリズムに適用したものであるという意義を持つ。ただし最近では、脱フォード主義的、ポスト・フォード主義的な複雑な（sophisticated）形のもので出現し、規模の経済に範囲の経済が組み合わさり、多様性がメルクマールになりつつある。

第3にそれは、特に地中海沿岸部のマスツーリズムについてみると、温暖な気候や海浜のレジャーの楽しさに関連したものが多く、顧客であるマスツーリストたちには日常的な労働からの解放観、リラックス観、そしてパーティ志向欲求をかなえたいとする者が多いという特色を持つ。マスツーリストたちには、旧来のような名所見物といった考えよりも、“3S”すなわちSun, Sea, Sand（時にはこれにSexとSprintsが加わり5S）で象徴されるものを求める傾向が強いものとなっている。

この第3点についてポンスらは、次のようにコメントしている。こうした“3S的ツーリズム”は、すでに19世紀終わりごろにイギリスのアイリッシュ海沿岸部、特にブラックプールなどにおいてみられたもので、今に始まったものではないが、第二次世界大戦後は地中海沿岸部が主要舞台となった。とりわけ1950年代～1960年代以降には単なる海岸部ツーリズムの枠を越えて多様化し、近辺の内陸部をも巻き込んで、ヘドニズム的欲望充足の傾向が強いものとなった。

それ故、今日では、地中海沿岸部マスツーリズムをもって単なる海岸部マスツーリズムと位置づけることには難しい面がある。というのは、こうした傾向は、現代社会において一般大衆が持つセンセーショナルな文化的現象の1つであって、社会全般というもっと広い基盤から考

察されるべき社会的現象の1つで、少なくとも現代西欧文化の1つの特色を現出しているものと把握されるべきものであるからである。

このうえにたつて、ポンスらは結論的に次のように主張する。すなわち、こうした地中海沿岸部における一般的マスツーリストたちの行動・行状・態度は、基本的には、それぞれのマスツーリストがそれぞれの本国、すなわち主としてイギリスはじめ北部ヨーロッパ諸国において日常的に行っている生活態度から発するものであり、そうした日常生活上の態度や行動、つまり生活文化をそのまま持ち込んで実行しているものである。その意味ではこれは、日常生活の延長と位置づけられうるものであり、そういう意味で、これは、端的には、バナルの現象といっているものである。

それ故、ポンスらによると、こうした現代のバナル・マスツーリズムは、旧来のツーリズムとくらべると、次の点を特徴とする。すなわち、社会的意味(meaning)や叙述的意義(narratives)では特段のものはないが、肉体性(physicality)や感受性(sensuality)では意味するものが顕著にあり、これらの点における特色が注目されるべきものである(P1,p.3)。

ただしその際、ポンスらは次の2点を断っている。第1に、こうした地中海沿岸部のバナル・マスツーリズムは、今日におけるツーリズム・マスツーリズムの全体を示すものではなく、限られた1側面を示すだけのものである。第2に、こうしたバナル・マスツーリズムの善悪を問う前に、その実態や社会的根源を十分に解明する必要がある。

この点からみると、ポンスらの問題意識は、他方においては、後述のように、旧来のツーリズム論のうちで、リゾート地を先進国に対する従属性においてのみとらえ、リゾート地を先進国のための快樂提供周辺地とみる考え方(この点について詳しくは参考文献Ω1, 28,49頁)に同調するものではない。あくまでも、地中海沿岸部におけるバナル・マスツーリストたちの文化の解明に主眼をおくものであるが、その際ポンスらは、かれらが究極的に解明せんとすることについて、前述のレフグレンが次のように述べていることを引用している。「ツーリズムについての標準化されたマーケティングは、ツーリストの標準化を生むものではない。これまでのツーリズム研究では、マスツーリズムではツーリストたちが経験するものは演出されたものであるという見解に立つものが多いが、こうした見解では、すべての個人個人のツーリストが持つ経験のユニークさが軽視されたり、無視されたりする」(L,p.8; cited in P1,p.4)。

ここで、ポンスらが明らかにせんとするものが、現代バナル・マスツーリズムの主たる特徴的諸点であることはいうまでもないが、その眼目は、そうしたマスツーリズムについて旧来欠けていた新しい考え方を提示、展開し、その特徴的諸点を解明する道筋をつけるところにある。それは、端的には、次の3点について解明するところにある、とされている。

2. バナル・マスツーリズム論の課題

(1) バナル性の根源の解明

第1の課題は、バナル性とバイオ政治性 (biopolitics) の根源を明らかにすることである。まずバイオ政治性とは、ここでは、「個人の身体 (body) および国民全体の集合的的身体 (collective bodies) についてケアをし (care), 調整をし (regulation), 改善をする (improvement) ことを課題として広範に行われる対話・実務の活動や制度の総体」(P1,p.7) と定義されるものであり、人間の身体的肉体的な側面についての配慮が疎かにされてはならないことをいうものであるが、マスツーリズムは一般大衆のバナル性を代表し象徴するものと規定される。

バナル性については、すでに1995年ビリック (Billig,P.M.) が “*Banal Nationalism*” を著し、一般ツーリストのなかには、自国外のツーリズム滞在地において自国の旗を掲げたり、自国を象徴するデザインの物を使用したり、自国での習慣を押し付けたりして、地元住民に対する無頓着さを発揮する者がいることを指摘している (B1:cited in H,pp.54-55)。

ポンスらは、バナル性とは何かについて、まずドゥボールの次の言葉を引用している (D,訳書180頁; cited in P1, p.9; カッコ内は大橋のもの)。「資本主義的生産体制は、外部社会と無関係に、所定の空間を合体させてきた。この合体は、同時に、外延的かつ内包的にバナル化 (banalization) を進めるプロセスである。(当該工場製品が目指す) 所定の市場という抽象的空間を目指してマスの (大量的) に生産された商品の蓄積が生まれるが、それは当該空間の自律 (自立) 性と質を破壊するものである」。

ドゥボールはさらにツーリズムについても言及し、それを、商品としての人間、人間の商品化 (personification of commodification) としてとらえ、次のように特徴づけている。「ツーリズムは商品流通の副産物であり、消費者の人間としての流通 (human circulation) であって、根本的には、バナル化したものを物見遊山するレジャー以外の何物でもない」(D,訳書181頁)。

バナル・マスツーリズムが実際にはどのようなものをいうかについて、ポンスらは改めて次のように述べている。それは要するに、ツーリストたちの「あからさまな卑俗性 (gritty vulgarity), 大衆の遊び志向 (playful crowds), 放縦文化性 (a culture of indulgence), 肉体的快楽追求性 (a series of corporeal pleasure), 伝統的なものに対する尊敬心とそれに対する反発心の混在 (blend of the ancient with the ironic), とりわけ低俗性 (kitsch) をいうものである。……端的に言えば、ツーリストの肉体的ニーズ (body) と感覚面 (sentiment) に土台を置くものであり、精神性や教養的ニーズは主要な役割を演じないとするものである」(P1,p.5)。

こうしたバナル性は、一般的に言えば、旧来のような有産階層志向的なツーリスト論では、(時には事実を無視して) 軽視されたり無視されたりしてきたものであるが、このことは、旧来のツーリズム論の階級性を反映したものであった。このことは、既述のように、旧来のツーリズム論では有産階層の旅行者をトラベラー、無産階層的なそれをツーリストと呼んで、両者を区別するところにすでに表れていたが、ポンスらの所論では、言葉の問題よりも、トラベルとツー

リズムでは内実的にも違いのあることに重点がある論述になっている (P1,p.5)。

バナル・マスツーリズムといわれる場合、それが階級の背景をもつものであることは、後述のハルドラップ (Haldrup,M.) 等ではさらに具体的に、それが労働者階級 (working class) をいうものであることが指摘されているが、少なくとも理論的には、ツーリズム (もしくはトラベル) における階級性の存在を指摘し、そのうえにたつてツーリズム論を展開したことは、注目されるべきこととわいていい。

(2)現代マスツーリズムの時間的空間的特徴の解明

バナル・マスツーリズム論の第2の課題は、ポンスらによると、現代マスツーリズムの時間的空間的特徴を明らかにするところにある。この点については、バナル性について引用した前記のドゥポールの言葉が出発点になる。ドゥポールは次のように言っている。「近代化は航海(旅行)から時間を取り去るが、近代化は航海(旅行)から地域(空間:space)の現実性も取り去るのである」(cited in P1,p.9)。

そもそもツーリズムにはこうした機能があるが、近代化の進展にともなうマスツーリズムの盛行によってこのことは一段と加速され、質的にも高度なものとなった。旧来あったところの、地域と共同体との一致・共存性、生活と地域定住 (sedentarism) との一致・共存性は、もともと近代化の進展により薄弱なものとなっているが、マスツーリズムの進展は、それを加速し強化する。ポンスらは「マスツーリズムによって起きる空間のハイパーモバイル化 (hypermobile) によって、地域の本物・実物性と定住生活の可能性がなくなり、その代わりに地域の商品化、地域再編化 (displacement)、疎外 (alienation) がどんどん進行する」(P1,p.10) と分析している。

それ故、マスツーリズムの研究では存在論的対応 (ontological shift) が必要になる。ここで存在論的対応とは、ツーリズム研究では、今や「モビリティのなかでの居住」(dwelling-in-mobilities) の時代になっているという考えにたち、例えばマスツーリズムには、流動的社会構成体 (fluid social formation) のなかにおいて空間 (地域・場所) を作り出す力 (place-making capacity) があることを認識する観点・理論的原理にたつことをいうものである。

ツーリズムなどの移動、すなわちモビリティの向上によって空間が放棄されると考えるのではなくて、空間が再概念化 (reconceptualizing) されると考えること、つまり、モビリティと地域変更をも包摂した形で空間・地域の再概念化をすることが必要になっているのである。もともとモビリティの進展は、「動かない物や人」の存在を不可欠の前提とするものである。そういう意味では、モビリティは、本来、「動くもの」と「動かないもの」との矛盾の統一体であるが、マスツーリズムについても同様な観点が必要とされるのである。

これを近年では、地域・空間に対するリレーションシップ関係としてとらえる動きが強いが (P1,p.10)、そういう意味でもリレーションシップ・アプローチが妥当なものである。このことは、近年のマスツーリズムでは、ある特定観光地・リゾート地の空間的特性に拘束されないものが望ましいことをいうものであり、前述のように、現代マスツーリズムが、本質的には、ツーリ

ストたちの本来の居住地（例えば本国）における日常生活の延長であるとするならば、観光地・リゾート地の選択においても日常生活との関係性、つまりリレーションシップが大きな論点になる。

それ故ポンスらは、観光地・リゾート地の研究では、少なくとも旧来からの研究対象について見直し（destabilize）を行うとともに、観光客・ツーリストについては、例えば心情が不変的で固定的なものと考えてるのではなく、一時的主観性（temporary subjectivity）の強いものと考えてる必要がある、という。

この点に関連して、地中海沿岸部における現代マスツーリズムの盛行については、多くの場合、それは資本主義的なグローバル化の進展により北部ヨーロッパの人たちが地中海沿岸部のヨーロッパ南部に押し掛けるようになったものにとらえられるが、ポンスらは、こうした考え方は不適切なものであるとして、次のように述べている。すなわち、そうした考え方によると、こうしたツーリズムやマスツーリズムにおいて根源となっているものは、資本主義体制が持つ暗黒な力であって、それにより他国から押し付けられるものであり、それが「マスツーリズムの形をとって現われ、環境破壊などをもたらす諸悪の根源になっていると考えるものであるが、そのような考え方は、あまりにも安易なものである。ちなみに、地中海沿岸部マスツーリズムについていえば、関係機関がそれを助長し促進している側面もある」（P1,p.11）。この点は、次の第3の課題に関連する。

(3) ツーリズム目的地としての地中海沿岸部の特色

バナル・ツーリズム論（ただし厳密には地中海沿岸部をツーリズム目的地とするもの）の第3の課題は、何故、地中海沿岸部か、という点である。このことによる同地域のメリット・デメリットである。これは結論的にいえば、ヨーロッパ地域で占める地中海沿岸部の地理上の特色に基づく歴史的ゆえん、および現在の社会経済的ゆえんに依存するもので、特定のどれか1つの要因で説明できるものではない、というのがポンスらの見解である。

実は、地中海沿岸部各地帯については、これまででは、これを基本的には同質的なものとする見解が強かったのに対し（P2,p.157ff.）、ポンスらの主張は、これを否定し、同地域は様々な特質や要因により規定されたさまざまな地域より成ると考えるものである。同様な考えは、すでにレフグレンによって提示されており、かれは地中海沿岸部を「多様なバカンス地」と特徴づけている（cited in P1,p.1）。

ポンスらは、地中海沿岸部は多様な特色をもち、多様なニーズを満たす所であって、このことのためにも、同地域は、前述したところの、同地域に志向するヨーロッパ人、なかんずく北部ヨーロッパ人のバナル的マスツーリストたちのニーズを最もよく満たす場所となっているというのである。例えば、ツーリズム論でよくいわれる文化交流という点でいえば、地中海沿岸部のバナル・ツーリストたちは、一般的には、異文化交流といったものを主目的とするものではない。かれらの求めるものは、日常文化の延長的実行であり、「真の意味でのリラックスし

た時間を享受できる地」を求めるものである。このことが誤解されてはならない。

この点についてポンスらは、現代マスツーリズムの本質は、地中海沿岸部のそれについても同様であるが、基本的には、結局「観光客たちが自分の家族的集団的アイデンティティと自己自身のアイデンティティについて、新しい側面を発見したり、それを育成したりする『人生の劇場』(theater of life)となっている」ところにあると結論づけている (P1,p.13)。

3. バナル・ツーリズム論の理論的意義

ポンスらの所論の理論的意義は、すでに上記において関連して指摘しているが、改めて総括的にみると、次の諸点が注目されるべきものである。

第1にそれは、バナル・ツーリズムの主体的側面について、これまでの観光客一般、マス観光客一般とは異なる諸側面、特性があることを明らかにし、それが、基本的には、本国における日常生活の延長・継続であり、それをかれらそれぞれの形で、つまりバナル的な考え方や形で実行しようとするものであって、観光地・リゾート地における異常な行為というものではないことを明らかにしたところにある。たとえそれが、道徳的に避難されるべき諸傾向を持つものであっても、観光地・リゾート地だけの異常な行為ではなく、広くいえば、現代社会の日常的行為であって、善きにつけ悪しきにつけ、現代社会の動向を特徴づけるものと理解されるべきものである。

第2にこのうえにたつて、それ故、アール等が「ツーリズムは非日常性に基づく見る目(gaze)が異なることにより成立する」と主張していることについていえば、ポンスらの所論はそれを否定するものではないが、それには補足的説明が必要であることを主張するものである。地中海沿岸部観光客たちも非日常性を求めて、例えば温暖な気候を求めて、観光地・リゾート地に来るが、そこでの行為は必ずしも非日常的なものではない。ポンスらによれば、もともとこれら観光客では「非日常的なものを観て歩く」という性向はほとんどない。自己の好む「非日常的な土地」において滞在を楽しむ性向が強く、西欧で多くみられる「滞在型ツーリズム」に属するものと解される。というよりは、西欧では今日でもこうした「滞在型ツーリズム」の多いことの事例ということができる。

第3に、ポンスらの所論は、観光客たちの本国とツーリズム目的国との関係を、特別に支配・従属の関係にあるものとしてとらえるものではない。この点は、例えば、「中枢対周辺」理論に依拠して、「観光客送り出し国=中枢=先進国」、「観光客受入れ国=周辺=発展途上国」として、両者の間に支配・従属の関係があるとし、「観光客受入れ国である発展途上国」を先進国のための快楽提供周辺地として規定しているターナー (Turner,L.) /アッシュ (Ash,J.) の1975年の所説 (参照文献T2) に対して、反論を提起したものとなっている (P2,p.166)。

他方において、こうしたポンスらの所論では、現代観光客に求められるべきコスモポリタニズムはどのような位置づけのものとなるのか、という問題がある。次に、この点について

論じているハルドラップの所論を取り上げたい。

IV. 真のコスモポリタニズムの促進論

ハルドラップが問題意識の出発点とするのは、次の点を今一度問う必要があるということである。それは、現在におけるツーリズム・マスツーリズムの盛行は、単純に地球全体的規模においてグローバルな相互関係が強まっていると理解していいものであるのか、あるいは、それはあくまでも西欧文化のヘゲモニーの元に地球全体をいわば西欧文化の凝縮されたものとする方向で進んでいると理解すべきものであるのか、という点である。この場合、ハルドラップは、これまでのツーリズム論では、これは異なった文化との交流という観点でのみ問題が論じられてきたが、現在のマスツーリズムでは、ツーリストたちの行為や体験がいかにかツーリストたち自身の日常生活と結びついたものであるかを明らかにすることが重要であることを強調する。

ただし、これらの点についてのハルドラップの主張は、結論を先にしていえば、ポンスらとはやや異なった見解となっている。すなわち、ハルドラップによれば、地中海沿岸部における、特にイギリス若者マスツーリストたちの行動は、多くの場合、総括的にいえば、結局、これまでの日常的な行動規範の貫徹を求めるもので、パナル・ナショナリズム的な傾向があり、現在のままの形では、一般的には、観光地・リゾート地に新しい植民地化傾向 (colonize) をもたらすものとなっているというのである (H,pp.54-55)。そこでは、ツーリストたちが、自国の風習や生活文化を現地に持ち込むだけでなく、現地の住民でもそれに迎合することが、ないものではない、というのである。

これは、地中海沿岸部ツーリストたちの行動が、真のコスモポリタニズムにたつものではなく、自国での日常的行為を優先させようとする、いわばパナル・コスモポリタニズムにたつためであるが、パナル・コスモポリタニズムを真のコスモポリタニズムへ転換させるためには、まず、ツーリストたちの正しい現状把握を必要とするが、それができていない。それは、これまでのツーリズム研究方法が適確なものではなかったからである。

ハルドラップによると、これまでの方法は、一般的に言えば、いわゆる代表的方法 (representational) であって、これは、ツーリストたちの表面的な現象を大数的に把握するだけのものであった。これに対し今や必要とされるものは、表面的な代表的な現象からさらに一步突き進んで、ツーリストたちの実際の具体的な行動を把握することができるものでなくてはならない。ハルドラップによると、これはこれまでの方法の転換 (turn) であり、まさにツーリストたちの通常の日常生活と結びついた行為・行状を明らかにすることを目的とするものである。

この点では、ハルドラップの主張はパナル・ツーリズム論的見解にたつもので、ポンスらの主張と変わりがない。違いは、地中海沿岸部観光地・リゾート地における、特にイギリス若者ツーリストたちの行動が、ハルドラップのいう真のコスモポリタニズムという観点から、どの

ような位置づけになるかである。そこでハドランプは、さしあたりコスモポリタニズムを次の3種に分けて、考察している (H,p.57ff)。

①美的なものの志向的コスモポリタニズム (aesthetic cosmopolitanism) : コスモポリタニズムのなかでもとにかく美的なものに憧れ、それを求めて旅行するもので、一言でいえば、「強い美的志向性を持ち、自己をそうしたグローバル・カルチャーの一部であると意識している」(H,p.57)ものである。ここでハドランプは、コペンハーゲンに住む、子供一人をもつ若者夫婦を取り上げ、その日常生活をインタビューし、叙述的に描いている。バナル・ツーリズムにはこうしたタイプもあることを示している。

②オリエンタリスト的コスモポリタニズム (orientalist cosmopolitanism) : コスモポリタニズムのなかでも、西洋(人)のオリエント・ヘゲモニー (orientalist hegemony of the Western) を基準とするコスモポリタニズムで、オリエントに対する西洋人のヘゲモニー性が行動の基準となり、それが習慣的に身につけているものである (H,p.64)。ここでは、毎年のようにエジプトやバリ島などへ旅行する60歳の年金生活者が例とされているが、かれはエジプトにはダイビングに行くだけで、現地人とのいわゆる交流はほとんどない。

③連結志向的なコスモポリタニズム (connective cosmopolitanism) : ハドランプの定義によると、これは、上記の美的なものの志向的コスモポリタニズムとオリエンタリスト的コスモポリタニズムとを超越的に統合したものであるが、それは、アピアー(Appiah,K.A.)の規定に依拠して、「根のある (rooted) コスモポリタニズであり、それぞれの人が自分の家だけではなく近所・地域に対する愛着心を持つとともに、同時に、他人の居ることや他人との交流に喜びを感じるものである」(cited in H,p.66)。

これは、ハドランプのさらなる説明によれば、何よりも抽象的な、時には言葉だけのコスモポリタニズムではなく、具体的に他人、他の地域・場所との交流に根差したものである。美的なもの志向的コスモポリタニズムやオリエンタリスト的コスモポリタニズムが、日常的に慣れたものと、そうではない他者であるエキゾチックなものとを対比・対抗させること、要するに自己と他者との区別・対抗を基軸とし、それを考え方の基準とするのに対して、連結志向的なコスモポリタニズムは、他人・他所・他文化と自己の結びつきに立脚するものである。ここでは、トルコからの移民との接触のなかで、こうしたコスモポリタニズムを持つようになった者の話が紹介されている。

ハドランプの言わんとするところは、ツーリスト・マスツーリストには種々な考え方や意向を持つ者がいる。コスモポリタニズムという観点からみても、少なくとも上記のような3つの考え方がある。現時点で望ましいものは、いうまでもなく、連結志向的なコスモポリタニズムであるが、バナル・コスモポリタニズムにおいてもこうしたコスモポリタニズムは可能である。地中海沿岸部観光地・リゾート地で見られる、いわゆる俗流的なバナル・ツーリズムについてみると、ツーリズム論のなかには、バナル性を誇張したもの (hyperbolic banalities) と

っているものがないではないが、それを回避しようとするならば、観光客たちにおいて真のグローバル化が進むことにより真のコスモポリタニズムが進展し、展開されるよう、その理論的実践的実際の姿を提示しておくことが望まれる、というところにある。

以上において地中海沿岸部マスツーリズムについての最新の考え方を考察してきたが、実は、ポンスらの問題提起は、その論文表題からもわかるように (P1,p.1)、地中海沿岸部観光客たちの行動は、これを「シリアスな」ものとしてとらえようとするもの (taking Mediterranean tourists seriously) でもあった。そこで「シリアス」とはどのような意味のことをいうのが問題になるが、ポンスらの所論ではこの点は必ずしも明確ではない。しかし、ポンスらの編書の執筆者の一人であるノックスは、既述の地中海沿岸部マス観光客たちの実態調査のうえにたつて、それを「シリアスな」行為と考えていいかどうかの観点からも検討を試みている。

それがどのようなものであるかを次項で考察するが、ただし、ノックスがここで「シリアスな」活動の基準としているものは、ステビンス (Stebbins,R.A.) が1982年に提起したところの (S2,p.49)、余暇活動について「シリアスな」(serious: 真剣な) 分野と「カジュアルな」(casual: 成り行きまかせ的な) 分野とに分ける考え方である。そこで、ここでは、ステビンスの所論を管見し、そのうえにたつて、地中海沿岸部マスツーリズムをノックスがどのようにとらえているかを考察する。

V. 地中海沿岸部マス観光客たちの行動はシリアスな余暇活動か

ステビンスによると、シリアスな余暇活動とは、何らかの目的意識的活動をいい、具体的にはアマチュアの活動 (amateurism)、趣味活動 (hobbyism)、ボランティア活動 (volunteering) の3種に従事するものである。これに対しカジュアルな余暇活動とは、それ以外の、特段の目的意識もなく、受動的無意味的に、漫然と過ごす余暇時間をいう。

シリアスな余暇活動は、自己の何らかの専門能力、熟練、知識、経験を生かしたもので、そうした能力の獲得・育成・発揮・発展・展開に関連した分野や事柄に従事するものである。ここで「シリアスな」とは、例えば「熱心・意識的」(earnestness)、「一生懸命」(sincerity)、「意義重要」(importance)、「注意深さ」(carefulness)などをキーワードにするもので、それぞれの人が何らかの程度においてこうした志向性をもって従事する余暇活動である。

それは、広い意味での修練・鍛錬・研究などののちに身につく能力や熟練を前提とし、努力が行われるものという意味において、一種のキャリア (career) の形成・展開を内容とするものである。これに対し、カジュアルな余暇活動は特別なキャリアの形成や展開を目指すことなく、いわばその時々欲求追求の思いのまま時間を過ごすような、あるいはただ漫然と時を過ごすだけのようのもので、例えば遊び (play)、うたた寝などのリラックス、受動的な、例えばただ見るだけの娯楽、おしゃべりなどをキーワードにするものである。シリアスな余暇活動は

実体・実質がある (substantial) 活動であるのに対し、カジュアルな余暇活動はそうした実体性・実質性が乏しい。

シリアスな余暇活動は、アマチュア的活動、趣味活動、ボランティア活動を3大領域とするものであるが、次の6つの特質によって特徴づけられる (S2,p.52ff.)。第1に、困難を乗り越えて進む忍耐、持続性 (persevere) があることである。第2に、学習・訓練・修練によって上達するキャリア性があることである。第3に、そのための努力を必要とすることである。第4に、その結果、何らかの成果があり、それが、その人に達成感や自己実現感を与え、自己満足・自己充実感を可能にすることである。第5に、このため人はそこに自己アイデンティティを見出し確保しうるものであることである。これはキケロが言った「威厳ある余暇時間」(leisure with dignity) に相当するものである。第6に、ユニークなエトス (unique ethos) を持つことである。これは、組織的関係や拘束がない場において尊敬を受ける根源を作り出す精神性である。

その際ステビンスは、アンルー (Unruh, D.R.: 参照文献U1) に依拠して、1つの集まりなどの場合、ごく一般的にみると、それに関連する人々には4種のタイプがあるとする (cited in S2,p.54)。第1はストレンジャー (strangers) で、当該集まりの活動について、裏舞台のいわば陰の部分で、その活動を支えている人たちであって、表面的にはほとんど見ることがない人たちである。例えばスポーツのアマチュア活動ではグラウンドの整備をする人たちである。第2はツーリスト (tourists) で、余暇活動の観衆等として現れる人たちである。第3はレギュラー (regulars) で、当該余暇活動のその時々の主役的な人たちである。第4はインサイダー (insiders) で、当該余暇活動の専門的中核的担い手となる人たち (devotees) である。

以上のステビンスの余暇活動論で注目されることは、まず、余暇活動をシリアスな活動とカジュアルな活動に分けていることであるが、ツーリズム論からみると、ツーリストという言葉が用いられていることである。ここでいうツーリストは、ポスト・モダン論でいう「人間はすべてツーリスト」という場合と基本的には同様な意味のもので、現在では、いわゆる旅行者であるツーリストと、そうでない者との間には基本的区別がないというものである。スポーツ・イベントの観衆等は、まさにツーリストであるというものである。

それ故ステビンスの場合、一般人の顧客としてのツーリスト活動は、上記のシリアスな余暇活動とカジュアルな余暇活動の区別からいうと、カジュアルな余暇活動に入るものである。従って、現代マスツーリストは、この点において、すなわちカジュアルな余暇活動にあるものである点において、ポンスらのバナル・マスツーリズムという規定と一致するところがあるものと理解されるべきものである。

ステビンスの余暇活動論を視野に入れて、現代の地中海沿岸部マスツーリズムについて分析を試みているノックスも、基本的にはこうしたバナル・ツーリズム論という枠組みを出るものではないが、しかしノックスでは、ポンスらよりも一歩進んでいるところがある。例えば、アーリなどのいう「見る目の違いによりツーリズムは可能になる」という命題は、ここでは必ず

しも妥当性を有しないと改めて主張するとともに、さらに、現代地中海沿岸部マスツーリストの行動には、バナル性だけでは説明できない、あるいはバナル性を越えた、ステピンスのいう「キャリア形成に類似の行動パターン」(career-like pursuit)が見られるというのである。(K,p.153)。

ただし、そのキャリアは、これまでのツーリズム論が前提にしてきたようなものではなく、端的に言えば、労働者階級を基盤としたものであり、労働者階級的マスツーリズム文化に立脚したものである。その際、ノックスは、イギリスのガレージ音楽は、一般的には、階級的属性を持たないものであると断っているが、実際には、労働者階級のシンボリックなものとなっており、それが地中海沿岸部イギリス若者マスツーリズムでも主役的なものになっていると論じている (K,p.153)。

このうえにたつて、地中海沿岸部イギリス若者マスツーリストたちの行状についてノックスが言わんとするところは、結局、ポンスらと同様、その行為は本国等において週末に行われているものと変わらないという点にある。従ってノックスは、総括的には、地中海沿岸部イギリス若者マスツーリストたちの行動は、これをステピンスのいうシリアスな余暇活動とみることはできないと結論づけている (K,p.154)。ただし、ノックスがステピンスの「シリアスな余暇活動論」を援用して主張せんとする点は、少なくともガレージ音楽の奏者たちは、イギリス本国でもアマチュア的シリアス性をもってそれに従事し、修練を重ねている者たちであって、そのことは地中海沿岸部に来ている場合も変わらない、というところにあると解される。しかし、このことは、別言すれば、地中海沿岸部イギリス若者マスツーリズムの行為は、結局、本国での行為の延長であることを補完し補強するものである。

結論的にノックスは次のように言っている。アイア・ナパやファリラキなどにおけるイギリス若者マスツーリストたちの行状は、基本的には、本国で週末に行われているところと変わらない。アイア・ナパなどでの行為は、あくまでも、同好の者たちなど日常的グループの者たちによる行為であり、異文化のなかでの異質的行為ではない。たとえ通常の日常生活とは異なる集団の者と居るときでも、その文化は同一文化の者という前提である。人間は、自宅で日常的に行っている仕方でも、ツーリズム先でも行動することがある。それと同様に、地中海沿岸部観光地・リゾート地におけるイギリス若者マスツーリストたちの行動は、本国におけるそれと基本的に変わるところがないものである (K,p.154)。

VI. 結—現代におけるバナル・ツーリズム論の意義について

現代マスツーリストたちの行為が、少なくとも地中海沿岸部のそれについては、本国における日常的行為の延長であるというポンスらの主張は、理論面でいえば、アーリらの「ツーリズムは非日常的行為」という命題に反論するものであるが、西欧に多い「滞在型ツーリズム」に相応したものであって、そうしたツーリズムの基本的理論型の1つを提示したものとみること

ができる。

その場合、それを労働者階級を基盤としたものとして、階級的階層の基礎について指摘したことは注目されるべきことである。このことは、旧来のツーリストの分類等では、それを社会階層的にはツーリスト一般としてとらえ、ツーリズム上の動機・行為や行動などにより、例えば、アロセントリックな者 (allocentrics)、サイコセントリックな者 (psychocentrics)、ミドセントリックな者 (midcentrics) に分けたり、オールドツーリストとニューツーリストに分けたりしてきた試みなど (詳しくは参考文献Ω1.93-95頁) にくらべると、基本的問題意識に違いがあるものといえることができる。

しかし、ポンスらの試みは、ツーリスト・ツーリズムの社会学的分析であっても、ツーリズム・マネジメント的なものではない。少なくともそうした意見がありうるものである。というのは、ツーリズム・マネジメントでは顧客であるツーリストが社会的にどのような階級・階層の者であるかは、既述のように、無関連のものであるからである。

ただしこのことは、ポンスらのように、現代マスツーリズムの動向の把握を何よりも理論的課題とし、そのためにはマスツーリストたちの考え方、すなわちツーリスト文化の解明が最も重要なことであるという立場からは、必須のことである。本稿の基本的問題意識であるところの、ツーリズム・マスツーリズムの批判論・抑制論と擁護論・推進論との対峙という点からも同様に位置づけることができるものであり、ポンスらの試みは、現代におけるツーリズム・マスツーリズムの積極的擁護論・推進論の1つの形を提示したという意味を持つ。

なお、ハルドラップの言う、地中海沿岸部観光地・リゾート地の新しい植民地化傾向についていうと、ポンスらの編書の枠内においても、ミンカ (Minca,C.) /ボーグヒ (Borghini,R.) は、モロッコでは「植民地時代に対するノスタルジア傾向」(colonial nostalgia) が顕著にあり、それがツーリストたちのパナル性と重なって、いわばパナル的な「植民地主義時代の再現」(restaging colonialism) になっていると論じている (M,p.21ff.)。

その一方、同編書のなかでも、カレトリオ (Caletrio,J.) のように、マリオルカ (島) の場合、少なくとも今日では、ツーリストといても別荘 (second residence) 居住者が多く (例えば同地域旅行者のうちドイツ人、フランス人ではともに67%、イギリス人でも27%)、かれらは現地居住者の感覚を持つ者であって、レフグレンの言うところとは異なるとしているものもある (C,p.112ff.)。

[参考文献]

- B1 : Billig, P.M., *Banal Nationalism*, London: Sage, 1995.
 B2 : Brendon, P., *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism*, 1991. (石井昭夫訳『トマス・クック物語』中央公論社, 1995年)
 B3 : Butcher, J., *The Moralisation of Tourism*, London: Routledge, 2003.
 B4 : Butcher, J., Against Ethical Tourism, in: Tribe, J. (ed.), *Philosophical Issues in Tourism*, Bristol: Channel View Publications, 2009.

- C : Caletrio,J., 'De Veraneo en la Playa' : Belonging and the Familiar in Mediterranean Mass Tourism, in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp. 111-127.
- D : Debord,G., *La Société du Spectacle*, Paris, 1992. (木下誠訳『スペクタクルの社会』平凡社, 1993年)
- H : Haldrup,M., Banal Tourism? Between Cosmopolitanism and Orientalism, in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp.53-73.
- K : Knox,D., Mobile Practice and Youth Tourism,in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp.143-155.
- L : Löfgren,O., *On Holiday: A History of Vacationing*, Berkeley: University of California Press, 1999.
- M : Minca,C./Borghi,R., Morocco: Restaging Colonialism for the Masses, in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp.21-52.
- P1 : Pons,P.O./Crang,M./Travlou,P., Introduction: Taking Mediterranean Tourists Seriously; in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp.1-20.
- P2 : Pons,P.O./Crang,M./Travlou,P., Corrupted Seas: The Mediterranean in the Age of Mass Mobility; in: Pons/Crang/Travlou (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, 2009, pp.157-174.
- P3 : Pons,P.O./Crang,M./Travlou,P. (eds.), *Cultures of Mass Tourism*, Farnham: Ashgate, 2009.
- S1 : Sharpley,R., *Tourism Development and the Environment: Beyond Sustainability?* London: Earthcan, 2009.
- S2 : Stebbins, R.A., *Between Work and Leisure: The Common Ground of Two Separate Worlds*, New Brunswick: Transaction Publishers, 2004.
- T1 : Tribe,J., *Corporate Strategy for Tourism*, London: International Thomson Business Press, 1997. (大橋昭一/渡辺明/竹林浩志訳『観光経営戦略—戦略策定から実行まで—』同友館, 2007年)
- T2 : Turner,L./Ash,J., *The Golden Hordes: International Tourism and the Pleasure Periphery*, London: Constable,1975.
- U1 : Unruh,D.R., Characteristics and Types of Participation in Social Worlds, *Symbolic Interaction*, 1979, No.2, pp.115-130.
- U2 : Urbain,J., *Sur la Plage: Moeurs et Coutumes Balnéaires*, Paris: Payot, 1994.
- V : Veblen,T., *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, 1899. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫, 1951年)
- Ω1 : 大橋昭一『観光の思想と理論』文眞堂, 2010年
- Ω2 : 大橋昭一「ツーリズム史に関する若干問題の考察」『関西大学・商学論集』第55巻第6号, 2011年2月, 41-60頁
- Ω3 : 大橋昭一「現代レジャー理論の一の考察」『和歌山大学・観光学』第5号, 2011年7月, 7-17頁